

兔絲子

八



吐て人の怨と聞諫臣表となりて主さるゝと云ふ人さ時ありて百辟ハ衆
ニ端しそ其治否と見ん郡長を以て阿て國の安危と申さば是より後て
記録別決断す別年せし訴人日減り訴陳徒すとしおはる諸卿
是を以て慮内の新止て諒鼓撃事なしと思ひおひつかその迷へ
る事元弘大乱の昨天下れ士卒豊て官軍は厲せし事又は他
なし只一戦の利といふ勲功の膏を知らんとする故なりされども世
鑑の後忠を立賞とすむべき幾千百と云敷とすべし我を凡る家被友
の外ハより恩賞を賜ひたる者ありざるや尸骸と捨て訴と止るそ
忠功の立ざるを恨み改道の西にやうとさみしる已に卒西に陽る者
諒我を以て驚て雍齒が功とえとて諸卒の恨と散むべきはより
大内裏造官あるべしとて詔せられ地は二十分の得方と割分て
色も名草の費ハこの功課とおしつる又あるも守復成と云ひ國
司格とすくはそより依て非職凡早の月代負應以後の新立の花園

を没倒しそ在廳官人檢非違使健兒コシヤイ下るる云々の様ひとるくせりおの
おふ人諸君の内家の稱を以て頼朝の時より有て既より多しき武名
をこの所代は如てその名を罷らせぬれども大名の家いつし凡民の類は
同じその憤り幾千百と云ふん次は天運圖は膺て新敵自ら亡びぬ
いづれも天と云ふて君の宸襟と休めざる者ある民は自正成
圓心長年く彼等が忠と云て漢の功はよきを韓信彭越張良蕭何
曹參也その志はあり義は向て忠と云ふ所何しと云ふ事とし何しと
後とんそ賞を均しくそ爵を日しつるべき事はお心そ人僅に本
一下の忠と全しそ守復恩補の由と云ふ事と云ふ事と云ふ事
貴中其功則有忠者進罰當其罪則有智者退くといひ今の改道
は抽賞の功ありと云ふ識りのなき人並て其論言の者なりといふ人
ありと云ふし武家の棟梁と云ふべき器用の仁智ありて報あるべき事
ありと云ふ恨と云ふ改道と精むる中し士糧と云ふて振るる事

疑ひをへくは作天馬の用と描きたるは大道不慮にあまの目急をを
は告る時^{イサ}所々用を述べたるは是等僧の罪を大乱の備へを説くは
不吉の表なりといふや此等物の類と止て仁政の化を致さんといふ
どもと説き及し言を説きし中さきしは竜顔がし逆鱗の事あり
し故に及ばざるを愛じり色ハ置酒を命も安んずるをその日の門遊を
ゆめぬといふ

一 南都の元徳親王と恨みきて数人の大僧を攻めしを六率判及爲
茂十六路を築き山法師に追ひしを山法師一首の相寺とぞ
とぞつらむ

山法師の衆子山法師とあがりていふ地の奥とあがりたる
山法師の衆子山法師といふは言を説きしと跡歌は阿波の上を
と云者^カ御らるる山法師の衆子山法師といふは言を説きしと
つらむ

比叡法師の所の上を築き山法師とあがりていふ地の奥とあがりたる
とぞつらむ

一 後鳥羽院の所時南都の僧六人は風流を免さるるを
仕立てしとあがりていふは言を説きしと跡歌は阿波の上を
と云者^カ御らるる山法師の衆子山法師といふは言を説きしと
つらむ

山法師の衆子山法師といふは言を説きしと跡歌は阿波の上を
と云者^カ御らるる山法師の衆子山法師といふは言を説きしと
つらむ

一 建保六年極月鎌倉の實朝右大臣は任じらるる又うもはるる
密に廣えと振る故右大臣家と官位宣下なる色とて家なりぬ
他と歌事実加加つしと再三時と後鳥羽院の所の上を築き山法師
と云者^カ御らるる山法師の衆子山法師といふは言を説きしと
つらむ

君、蜀、春秋、臣、謝、老、恩、世、涯、岸、報、摘、遅

と作らねばならぬと思ふ人の情は、雨夜をぬぎて、つらさを忍び、ひとと目
を合す月、本院の大仏の養育、不実よりして、傲る古、宰、持、師、は、遷、れ
まゐ、い、斗、世、も、恨、め、く、雨、情、も、深、め、け、り、も、粒、若、臣、の、礼、は、忘、色、
難、し、思、水、の、花、も、思、び、え、ど、や、是、さ、忍、び、ん、都、の、形、見、と、か、の、雨、夜、と
雨、身、は、濡、ら、さ、り、ね、ひ、の、心、の、目、か、く、も、忍、び、さ、さ、忍、び、り、る

去年、今夜、侍、清、涼、秋、思、詩、篇、独、断、腸

恩、賜、御、衣、今、在、此、捧、持、毎、日、拜、餘、香

一、後、江、相、公、の、澄、明、は、お、れ、と、後、居、世、と、あ、ら、い、れ、る、新、文、と、

悲、之、亦、出、真、思、於、老、後、子、

恨、而、更、恨、莫、恨、於、先、親、

と、あ、け、る、花、を、お、も、た、後、の、恨、は、さ、さ、り、お、と、さ、り、難、く、表、す、お、も、た、の、色、

一、中、納、金、殿、基、卿、は、ま、ぐ、く、道、心、お、も、し、ま、し、て、つ、の、の、云、々、と、

古、墓、何、世、人、不、知、姓、与、名、化、為、路、邊、花、今、々、春、生、

一、和、泉、武、部、男、の、あ、い、く、も、あ、る、は、ま、な、り、侍、て、こ、る、は、堂、の、お、も、た、と、

お、も、た、く、も、涙、の、雪、と、我、身、より、あ、ら、い、づ、る、玉、が、と、ぞ、と、

と、よ、う、を、い、れ、も、雨、社、の、内、は、思、ひ、こ、る、雨、若、う、と、

奥、山、は、こ、さ、ま、そ、る、瀬、津、原、の、玉、あ、る、計、ゆ、が、思、ひ、と、

と、あ、る、し、雨、ま、る、と、

一、和、泉、武、部、が、女、小、式、部、月、侍、付、世、の、び、好、ひ、り、う、張、り、な、る、と、人、の、歌、林、と、見、

あ、ら、ぬ、程、を、ぬ、き、て、あ、し、う、り、さ、き、も、和、泉、武、部、侍、は、濡、衣、で、ひ、こ、を、押、し、

泣、く、は、目、を、濡、め、は、思、あ、け、く、母、が、顔、と、つ、く、と、思、て、真、意、の、下、は、

い、う、も、せん、お、び、き、方、も、お、も、り、は、親、ま、と、る、の、道、と、知、り、と、

と、ひ、り、色、も、天、井、の、上、は、高、あ、ら、う、と、あ、ら、表、と、い、ひ、て、う、雨、身、の、あ、ら、う、と、

と、さ、え、て、思、お、も、り、と、

蛇の力石の眼よりうろく義家何となく中とつるにえいつきと蛇の尻と切て
まうろ名を傳ふるくこの巻動かくのどしゆしゆうろくもいふ事何しの
日記もえ、うろくと事を知つてのうろくも中とつる

一 道奇阿若梨と和泉式部と一車と何しゆとつるも道奇後むきてお
うろくも和泉式部とどかき居るぞといひたれど

すしやよし若やむしといづれえともあひないあちもこれ

一 東大寺住持の時鎌倉右大將上洛有るも法皇も室龜井内膳もとら
あされと関東も有難くこそ傳ふるも中とつるもいふ事何しの
中とつるも君の内秘道中御物といふも中とつるも眼とつてゆづるも
きとつて一見とせど上せらるも法皇も定て身よのうろくも
うろくも外もと思念される

一 堀河院の時時青君江師若蒲とあつたうろくも

進上 水追 葛蒲

千年 五月五日

大江為武

は世と殿とあされく人うろくも信り色をれも誰とそゆとある人なり
ちも師頼とあつたうろくもいふ事何しの

たてようろくもあづるうろくもあづるうろくもあづるうろくも
進上 水追 葛蒲 千年 五月五日 大江為武

一 善母は昨自慢のなると二首

又善母のなるとも或人の信りき
いふ事何しの
又善母のなるとも或人の信りき

世の中とつるうろくもいふ事何しの
世の中とつるうろくもいふ事何しの

命といふやう人のおしやうもいふ事何しの
命といふやう人のおしやうもいふ事何しの

舟屋の住師の巻の敷きひく若れ人君とあつた

多きこの仕事し、悦みして背負ふる葛^{ツツ}包^{ツツ}何ぞと問ふはあしく
の世と昔といはれ海荒とやうく此はよりともを命と爲て願ふるな
れといはる病を命と爲りては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ
んといふもいふれも命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ
いふれも命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ
送るべきも千里を命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ
いふれも命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ
病重うして命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ
不の長の計は命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ
村を命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ
この病と云うて命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ

ふも——ぬ山の奥へとやどまるといふ病を命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ

仁孝を命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ

彼、齊の顔^{ハナ}指^{ササ}士^シの志を牌^ハ希^シへ供しぬ又、命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ
芝といふ病は命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ
もし、いふ病は命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ

一 或者まどいして母の親の命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ
母を——いふれよある

いふれよ命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ
世に官は命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ

一 元祿のころ、命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ
御世を命と爲ては是れしは命を命と爲て求むべしといふれ

森が——これとおこり、鹿の声

此の如き八咫鏡もまた海あり此を極きて米常の像ハ必其神とておぼえ行
御の像ハ必其法神とて是の書とて其書を著す神とて常めて
其風化理成の諸事といふは和奇者流ハ此より抑々神とてあつて山
のうしとてあつてあつていふもさへいふは華嚴法神とてあつて山
名もく此神ハ法神ハ俗間とていふ義理ハ稱するに花散といふは弘法大
師の奇物とていふは佛教大師の徳とて是の世にいくとも有べし

一 後原不比等とて法海公とて封じあつていふやう或は此の人のことと思つて有俗
間のものなり比治の儒者近江彦根の人の詩集の序に湖中の勝常を
稱して勝地ハ居士有べし此は法海公の事とていふは人
とていふと著るき笑ふべし其の義とて大事暗し法海公とて俗家の
大臣とていふ功高宙とていふは終は文章とていふ詩仙とていふを解
計の人のこととていふは語るべしやとて是の死後の封とていふは
何事とて是の事とていふは三皇五帝より下あ今の法神とていふこととし

あき人のこととていふは吾生國の古くはあきとていふは公の如きとていふは
言とていふは是を何とていふは或儒は韓人は其語せる時自其の
事とていふは韓人なりとて或人といふは同じ教とていふは
の事ハ日本紀とていふは法海公とて封じしは其の事とていふは日本紀とていふは
日本紀の文のよしし廢帝天平宝字四年八月、勅云勲績滿於宇宙
朝賞未充人望宜倍太公故事追以近江国十二郡爲法海公
餘官如故其後世例とて封とていふは事照宣とていふは忠仁公
とていふは公とていふは九公とていふはあつていふは法海公の世人
文忠とていふは論とていふは封とていふは稱とていふはあつていふは
るは史とていふは儒家のうち新井白石貝原益軒伊藤東涯
古伝谷氏の諸先生のいふは公の人とていふは不忠といふべし

一 孫食言獻書不富ハ古の誠吳子靈亦亦同し瑞祥とて獻とて
君上の喜とていふは是が基とていふは凡ハ照別とていふは

らん述懐の奇の中よりあつたりしきなる思ふを但おのこ 伴善庵が
いさちつとなく徳のふらぬきせんうとよし道理のつづきの
一 鶴林玉露は雖貪者賦 廉詩 仕者賦 隱逸詩 亦豈能 逃 識
者之眼哉又揚誠齋云古人之詩 天也 后世之詩 人焉而已矣此
後得之とより此以上人の詩は

一 山輝くちし心きやうもももあまれんものうハ
とつう自己とて試して實のおゆべうとさるハ解らるるもの也
一 仏經を解してよめるハ儒經より史の教の格と解せざる例ハなげ
菩薩二家の儒教は奇人も少くあるといふも昔ハ儒教といふたぐ
文字の事ハ世に用て道理とするも仏經より儒經とよりさるゆ
ゑなり但觀はるるを解と儒教の意はよきる處もよくありて流
記傳やうと考へば本柄はあはれ
あまれ原る——とけあまらるるを解ひとあまれ——と

天ハ多きはあて早は聞 積善の徳慶積不善の殃必報ある心なり又
人毎五の教絶果て 神と佛と何とあるん
是ハ世の教絶てられんが神佛を守るべきよしなるん心せよ後和
の事とも祈しといひてそれとあはれこそ不仁不義の徒なりとよき
諫めつし又九事の大長

たの——みききと教と流るるを世にあらはれんと人なりと
富貴を保てく養ふ否と念ひ心せよあはれ時く人ハ徳とよきものなり
あり新集集は新集白

君の為民のためぞと思つじと雲と星と何々集らん
世事はハ移ればとひきり——南朝は君子多し色ハあるべし
一 能同の云々集は儒教孝道といふ人の奇句集は

為民教長人つてよふをせられ
意——くききとみよし人つてよふをせられのふききと

一 觀山水亦如讀書隨其見趣之高下こころとつる淨古人の語と幻阿法師
とてあてあき時ある事と老て身びなればあす日しものなりびと書し
其れを事とてゆきあふふゆきあふふ風雲月露を感ずるに滋味を知り
ぬしけりあふ又ね永る貞徳老ぬ色ハ眼ハあがりぬいさるると自れ死
とるのらきしハあかし志うのちび人の志びとをなぬははうて人
をるるぞし吾のうくのあふ事といふ知る人少しとて死べとを
思ふぞ初生うカレウ惜きあふちと後初と理廣くくものあふん吾儕
の解解とびしかし事どもあふあふ人あつては解やちどらん
おろろあうし

一 東師の烟維煙意意よく世の中れ事何事とあき同獨舟は事唯あ打
るべうべまいて我日の年のさうしとるるそ大和舟を枝折とせされハハを
神路の深きとまけ入事有んや信成たの事なり

四方の海硯の水はつるをうけあふとれあきやうきび

一新事とあきとせ二三事とあきとあき

寄う述懐

前内大臣隆

君うとあわうきつる梓弓もとれあきとせとらあや

東山親王

君のこの世のとあきとせとあきとせとあきとせとあきとせと

聖王

花鳥川とあきとせとあきとせとあきとせとあきとせとあきとせと

源朝武敏長

引えうし心のうきとあきとせとあきとせとあきとせとあきとせと

寄車述懐

妙光寺内大臣

とハと車とあきとせとあきとせとあきとせとあきとせとあきとせと

寄夜述懐

前内大臣光任

今あきとせとあきとせとあきとせとあきとせとあきとせとあきとせと

はらうよき物 蟻の音 揚子 魂棚の佛の音 法師の系図
陽春の月 時沙の音 寺院の音 花尼の足音
あつてよき物 元日の鶴の音 花尼の足音
うし画の音 懐中の葉 長日ふちの音 玉一の音
春日一風 十日一雨

音あつてよき物 玉一の音 釜の音 くらが 月下の音
あつてよき物 うし画の音 くらが 鶴の音 雷の音
くらが 鶴の音 急流の音 くらが 雲の音
くらが 電 馬車 石琴 竹簾 掌入
あつてよき物 神泉苑の池 右近の馬場 三十三間堂 柳の音
招投寺 東寺の音 鳥子 鳥子
花尼の音 花尼の音 花尼の音 花尼の音
花尼の音 花尼の音 花尼の音 花尼の音

仙野常世 花尼の音 花尼の音

花尼の音 花尼の音 花尼の音 花尼の音

花尼の音 花尼の音 花尼の音 花尼の音

花尼の音 花尼の音 花尼の音 花尼の音

花尼の音 花尼の音 花尼の音 花尼の音

花尼の音 花尼の音 花尼の音 花尼の音

花尼の音 花尼の音 花尼の音 花尼の音

花尼の音 花尼の音 花尼の音 花尼の音

花尼の音 花尼の音 花尼の音 花尼の音

花尼の音 花尼の音 花尼の音 花尼の音

花尼の音 花尼の音 花尼の音 花尼の音

花尼の音 花尼の音 花尼の音 花尼の音

此日建賢校令の得志の奇は

一 累老人をきぬきううり蠶食をてふゆゑなる小田の強固と
和漢の人物をくくても著あつたものと反右の内よりよくあやうい

世居公を華雲長は似て文武とあり

吉備公と漢の叔孫通は似たり

孫義家と蜀漢の趙雲は似て寛大に

形跡と後慕忠堂は似て文あり

平重盛と齊景公は似て常あり

本為義仲と楚頃襄は似たり

形跡と晉文公は似て強忍なり

義経と韓信は似たり

平知盛と秦王猛は似たり

宗盛と蜀漢劉禪は似たり

少卿と信西と鄭子產は似て識懐之
此系新井白石傳覽多識
子產は似る人なり

小條時政と晋司馬懿は似たり

恭時と齊景公は似たり

後房と漢張子房は似たり

楠正成と諸葛孔明は似て文と得し

正弘と姜維は似たり或曰く此は正俊に似たりと云

足利直義と魏曹操は似たり

前田美貞と蜀馬超は似たり

室所茂満と秦昭王は似たり

細川頼之と燕樂毅の志と似たり

織田内府と吳孫權は似たり

武田信玄と齊桓公は似たり

長尾謙信と後趙石勒は似たり

毛利元就の蜀照烈に似たり

右三六條を它教多あきなり及ちの邦はゆきなるもれききすれはこころ
不載

一 猪尾常房ハ三好家の右史^{ヨウシ}シ人となり閑雅^{カンヤ}にしていこき古くは
能書の名ありし事考^{コウ}なりと元和^{ゲンワ}の語をわづらひしと其の阿波屋藤原を
好^スみあひてあひくされしと一とを元且の語を兼て公の賜し物と云ふ
なりとぞとるふるなりと云く

あや—やそれハ惟^{タリ}なりきめとあきふなる所なりとあり
秋のふるのころなりと云ふなりと云ふハ公のなりと云ふなり
比^ヒは比^ヒ孫^ミ通^ツ有^ユ—と云ふ又筆書なり

中^{ナカ}くは事^{コト}なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

一 萬の事^{マンノコト}物^{モノ}知^チり^リなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
るなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

あるなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
手^テありてちの事^{コト}はたひぬその事^{コト}の終^{ハタチ}結^{ムス}なりなりと云ふなりと云ふなり
よくと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
一 俗^{ソク}俗^{ソク}なる事^{コト}を惜^{オモ}む士^シハ惜^{オモ}む又云人ハ一代^{イチダイ}なりと云ふなりと云ふなり
の語^{コト}を士^シハ惜^{オモ}む如何^{イカニ}と云ふ人ハ唯^{タリ}名^ナ有^ユ事^{コト}と云ふなりと云ふなりと云ふなり
さうしむなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
是^{コト}を惜^{オモ}むむむなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
求^{モト}むなりし君子^{クニノリ}貴^キ之^ヲ求^{モト}む如^{イカニ}の者^{モノ}なり又權^{ケン}利^リとししものなり
は切^キなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
ゆゑなりと云ふなり

一 老^{ロウ}武^ブの言^{コト}は曰^{イハレ}貪^{オン}の戒^{ケイ}は益^{セキ}なり事^{コト}大^{ダイ}也一生^{シヨウ}奢^{シャ}侈^チの言^{コト}を慎^シむべしと云ふなり
疎^ソ就^{ジュ}と求^{モト}む意^イなりし二也膏^{コウ}肉^{ニク}の味^ミ臍^シ臍^シを爛^{ラン}び身^ミ健^{ケン}なりと云ふなり
是^{コト}三^{サン}也子^コ孫^{ソン}を儉^{ケン}なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

恨りハ悉く夕づけざし又つよく死を畏ル怯弱の謂とあるにけり此の者ハ物ヲ
を怖るに似たり

一 御邦代碑ニ載る三吳の村民ある疾^{ヤマイ}色ハ常と不服^セ此碑^{イデ}は是れこのむ我
曰^{イハレ}山中の民と亦諸病^{イデ}とん^{イデ}邦佛^{イデ}は禱^{イデ}を不^ス愈^{イデ}將^{イデ}は死^{イデ}んとあるを至^{イデ}
後或^{イデ}き^{イデ}医^{イデ}術^{イデ}と求^{イデ}む他郷^{イデ}の人^{イデ}皆^{イデ}山民^{イデ}惑^{イデ}べしと云^{イデ}余^{イデ}曰^{イデ}幸^{イデ}く不^{イデ}爲^{イデ}
庸^{イデ}医^{イデ}所^{イデ}殺^{イデ}

一 延喜の時公々奢^{イデ}侈^{イデ}とて車^{イデ}腹^{イデ}甚^{イデ}難^{イデ}し帝^{イデ}侯^{イデ}の令^{イデ}有^{イデ}とてと改^{イデ}め易^{イデ}べ
一日^{イデ}丞相^{イデ}時^{イデ}平^{イデ}と云^{イデ}詔^{イデ}して公^{イデ}々^{イデ}帝^{イデ}大^{イデ}怒^{イデ}る時^{イデ}平^{イデ}慄^{イデ}然^{イデ}とて退^{イデ}き関^{イデ}門^{イデ}
ある事^{イデ}一月^{イデ}後^{イデ}公^{イデ}々^{イデ}依^{イデ}てを旧^{イデ}と改^{イデ}むこれハ是^{イデ}帝^{イデ}階^{イデ}の時^{イデ}平^{イデ}と
お傳^{イデ}く此^{イデ}事^{イデ}と作^{イデ}るものて公^{イデ}々^{イデ}の奢^{イデ}と懲^{イデ}時^{イデ}平^{イデ}罪^{イデ}を犯^{イデ}る事^{イデ}に
看來^{イデ}は此^{イデ}以^{イデ}備^{イデ}列^{イデ}能^{イデ}依^{イデ}るなりとてと士^{イデ}庶^{イデ}とて云^{イデ}る事^{イデ}一^{イデ}堅^{イデ}りんを
の心^{イデ}と云^{イデ}る事^{イデ}一^{イデ}延^{イデ}喜^{イデ}帝^{イデ}子^{イデ}及^{イデ}つる事^{イデ}一^{イデ}灼^{イデ}然^{イデ}と云^{イデ}る

一 楠^{イデ}正^{イデ}成^{イデ}を決^{イデ}し無^{イデ}序^{イデ}に付^{イデ}とて云^{イデ}は振^{イデ}开^{イデ}の篇^{イデ}に敬^{イデ}告^{イデ}誨^{イデ}して曰^{イデ}ク

汝^{イデ}幼^{イデ}年^{イデ}の爲^{イデ}き和^{イデ}田^{イデ}友^{イデ}地^{イデ}矣^{イデ}尾^{イデ}首^{イデ}は父^{イデ}とし事^{イデ}公^{イデ}し每^{イデ}事^{イデ}母^{イデ}は謀^{イデ}る
る^{イデ}又^{イデ}学^{イデ}字^{イデ}は懈^{イデ}るべし己^{イデ}は十^{イデ}才^{イデ}といふ専^{イデ}ラ義^{イデ}理^{イデ}と聞^{イデ}字^{イデ}
と識^{イデ}語^{イデ}と記^{イデ}る^{イデ}と惣^{イデ}と云^{イデ}る事^{イデ}勿^{イデ}し此^{イデ}文^{イデ}意^{イデ}詳^{イデ}は内^{イデ}に精^{イデ}熟^{イデ}せし
べしと云^{イデ}哉^{イデ}言^{イデ}也^{イデ}との或^{イデ}人^{イデ}或^{イデ}き学^{イデ}問^{イデ}並^{イデ}にべしといふ正^{イデ}成^{イデ}の意^{イデ}と
あり

一 細^{イデ}川^{イデ}三^{イデ}斎^{イデ}翁^{イデ}性^{イデ}茶^{イデ}道^{イデ}と好^{イデ}むある茶^{イデ}客^{イデ}の名^{イデ}と号^{イデ}る者^{イデ}多くて賦^{イデ}之^{イデ}
寛^{イデ}永^{イデ}中^{イデ}は付^{イデ}て東^{イデ}武^{イデ}あり幕^{イデ}下^{イデ}の寵^{イデ}信^{イデ}如^{イデ}賀^{イデ}守^{イデ}堀^{イデ}田^{イデ}正^{イデ}盛^{イデ}人^{イデ}と語^{イデ}て
曰^{イデ}我^{イデ}三^{イデ}斎^{イデ}翁^{イデ}は信^{イデ}り名^{イデ}意^{イデ}と親^{イデ}れと欲^{イデ}は人^{イデ}等^{イデ}三^{イデ}斎^{イデ}翁^{イデ}は苦^{イデ}く三^{イデ}
斎^{イデ}翁^{イデ}は正^{イデ}盛^{イデ}即^{イデ}チ性^{イデ}を過^{イデ}事^{イデ}然^{イデ}則^{イデ}家^{イデ}室^{イデ}の旧^{イデ}物^{イデ}若^{イデ}干^{イデ}十^{イデ}種^{イデ}と
あし茶^{イデ}客^{イデ}陳^{イデ}ぬ皆^{イデ}武^{イデ}客^{イデ}の意^{イデ}望^{イデ}ハ唯^{イデ}茶^{イデ}客^{イデ}は在^{イデ}て武^{イデ}客^{イデ}は在^{イデ}る非^{イデ}
是^{イデ}故^{イデ}茶^{イデ}客^{イデ}阮^{イデ}ある^{イデ}雖^{イデ}也^{イデ}實^{イデ}を不^{イデ}悦^{イデ}と云^{イデ}人^{イデ}有^{イデ}り意^{イデ}を問^{イデ}て曰^{イデ}聖^{イデ}烈^{イデ}
茶^{イデ}客^{イデ}と云^{イデ}む亦^{イデ}略^{イデ}知^{イデ}るべしと云^{イデ}る茶^{イデ}客^{イデ}中^{イデ}あさる公^{イデ}曰^{イデ}武^{イデ}將^{イデ}會^{イデ}
武^{イデ}將^{イデ}茶^{イデ}客^{イデ}と云^{イデ}ふは是^{イデ}他^{イデ}物^{イデ}と雜^{イデ}んやと問^{イデ}なる也^{イデ}

要借米壹石五斗之事

天王寺柴田高藤氏具米宜旨并五斗借調知發明也作平野
社法樂之舞 神馬遊名 玉藻 若萩 經書 梶子
被褥不足同干茲令改知 延所不齊有る處以年際月切掛添
野白山 結束之狀如件

元曆二年二月二十八日

武部坊主 芝判

高藤氏料具田次殿

又場中抄津成の方へ送る状

作樂之舞の酒あきのりし事不致とて兵軍健正なく別たる者にて
元日廣客に供米七斗借信信吉并指示し助十斗子遣りし事
持君より馬不降し申し取付居たりん 弘明一斗云し衆并矢上
の子具を不難運し申し也播磨一系忌村に旧子貢降し信を
て白羽へ納るるべし 乃永藤崎舟積難用唐の浅玉貫文急る
廣

お成るへきし條判官不し日所具子河津波ありあるを宣す

元曆二年二月二日

并書

高下抄津成の方へ

又朝日神主へ送る

馬州 豆のり 土俵指組 三俵舟積とて借宜可也凱陣の
表の白きん時三増倍の延所難ひ不致はる款の事より
通しよりあてしるの所の料極急と致へし 以俵状如件

元曆二年二月朔日

年廣

朝日神主の後追者不

私云世等の戦ふ不戯云く直るといふも其時の事 體武士の風俗并
受く質朴なる事 是より足る故に記

一或人東進にありて大津なる石場を便船し 是より俄然とて空の處
なり以戲ありし 船より人あやとさぐ中より是をとりて

深秘あれ師傳と讀べし印刷の書は腕漏傳字誤字あり
觀語ある多し其國書の多き事其書目録と目録と知れし俗儒の
の故實と知れ日本は其書なしと論じ經濟の事ありと云ふ事一の
とと擧用せるの述作あり聖人の道と云ふ一日な色と云ふ事其書
風ありを存するにこれの柱は膠あるの如きとあるんあの色は淺見と
思量とべし本中より法令の事と云ふ事一白と他と慕ふ
燈臺下暗しと云ふ事其書と云ふ事

一 外國の書を見よこの書力と國書と事と心得候ふ言と云ふ
淺見と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事
らん其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事

都て月と花と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事
右凡下の散と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事
ふみらん目と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事

一 將より教と感じしやう

一 右平記理を抄し新田のやま屋凍死と稱して事と附く事と載る事
感得の事と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事

武士の文より鑑と鐸の事と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事
世に武士の事と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事

一 井村の信實朝臣三人あり其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事
其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事

一 其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事
と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事
院少將殿依爲此道之進修不顧老眼之不堪其書と云ふ事其書と云ふ事
其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事

一 其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事
其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事
其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事
其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事其書と云ふ事

のふひーと笑ふちう宜なる武学文を乞食袋の中へ入れと耳底に
も書けし是は何とて一歩取込て入用と夫と用るべしと俗
そ文章とて四角なる文章と並へ亦作と作を博學なりと何とて伏
さるるべしと何とて

一 本朝怪談は經氣を損氣と云へるも其幕京茶とて細川勝元
が長う經氣を損氣と云へるも其幕京茶とて細川勝元

いふふとめきとてよトや旅人の何とて其幕京茶とて細川勝元
と師とて其幕京茶とて

一 醫の事雜律は曰て醫為人念藥及題疏針刺誤不如此本方殺人
者徒一年疏曰不如此本方於人無損者不論尊卑貴賤同答三十
詐偽律云送違方詐療病而取賤物者以盜論と何とて其幕京茶
至要抄とて見へる令て醫疾令あり医家此方古法とて思量あり
たし古語とて學書者費紙學医者費人とて其幕京茶問陰

陽應象大論篇は黃帝曰治病必於本とて其幕京茶仁術之宰相
たらん良医とて古人とて其幕京茶仁術之宰相
りやとて送違方の序とて其幕京茶仁術之宰相
らる市朝とて其幕京茶仁術之宰相
輩如何と仁術とて其幕京茶仁術之宰相
とて其幕京茶仁術之宰相
街は其幕京茶仁術之宰相
きとて其幕京茶仁術之宰相

傳説は一休和尚喉痺の薬を赤城山とて其幕京茶仁術之宰相

一 經とて其幕京茶仁術之宰相
せんといふ宜押留て曰僧尼ハ別とて其幕京茶仁術之宰相
僧僧大なる顔色とて其幕京茶仁術之宰相
とて其幕京茶仁術之宰相



